

彼女の東京芸術大学時代からの大親友が私の三男俊介の永年のヴァイオリンの先生だったというわけです。劉先生とは歴史に対する興味を共有していることがわかりました。二人とも海賊にも興味があるとわかって大笑いでした。私はかつて読んで面白かった本をお送りすることを約束しました。それは清末、中国南部海岸一帯を跳梁跋扈した海賊についての研究で、アメリカ人の学生が博士論文として発表したものが本になったものです。

(Robert J. Antony, Like Froth Floating on the Sea. The World of Pirates and Seafarers in Late Imperial South China. 2003)

海賊の頭領の中には女性もいたそうです。

奇縁・奇遇を掛け合わせたようなめぐりあわせで初対面の人と新竹で本の話などができるとはなんと幸せなことでしょう！この日の話で劉先生のご専門は高エネルギー物理であり、台湾で初めてのサイクロトロンを建設されたこと、台湾物理学会会長などを務められたことなどをうかがいました。大学のサイクロトロンも見学させていただきました。

またこの2回の新竹訪問で私の遠い記憶の底にある記憶、住んでいた官舎は旭町という住所だったということも確認できました。在来線の新竹駅から歩いて数分、濃い緑に縁どられた運河の両岸が当時は官舎街だったそうです。因みにこの新竹駅も当時のままに使われています。

## 台湾と日本を結んで—上山満之進に学ぶ会・児玉識先生の思い出 安溪遊地・安溪貴子

はじめに

第11代の台湾総督だった上山満之進（かみやま・みつのしん）が、1928年の退任にあたって陳澄波に依頼した油絵「東台湾臨海道路」が2015年に上山のふるさと山口県防府市で見つかりました。上山の伝記を書くための資料を、上山が寄付した防府市立防府図書館（旧称「三哲文庫」）で探していた歴史家の児玉識（こだま・しき）先生の発見です。この1枚の絵から、台湾嘉義市と山口県防府市との民間交流が始まったことは、児玉先生が本誌に書かれた記事によってご存じの方も多いと思います。具体的な交流の進展を心待ちにしておられた児玉先生は、2019年10月13日に病気のためお浄土にまいられました。

### 児玉識先生の略歴と台湾との関係

1933年、山口県防府市富海に生まれる。1960年、京都大学大学院修士課程文学研究科修了。下松高校、豊浦高校、宇部工業高専、水産大学校勤務を経て、1998年より龍谷大学文学部教授、2002年、同定年退職。文学博士。歴史学専攻。富海の円通寺住職として「富海史談会」「上山満之進に学ぶ会」などで活躍中の2019年10月急逝。享年86歳。著書に『上山満之進の思想と行動』（防府市、2016年）、『加藤辨三郎と仏教 科学と経営のバックボーン』（法蔵館、2014年）、『近世真宗と地域社会』（法蔵館、2005年）、『近世真宗の展開過程』（吉川弘文館、1976年）、『維新の先覚・月性の研究』（マツノ書店、1979年、共著）など。



児玉識先生 (1933-2019)

児玉先生が2016年に海鳥社から出版された『上山満之進の思想と行動 増補改訂版』から引用します。前年に児玉先生ご夫妻が嘉義市を訪問して受けた熱い歓迎が学者の人生をも変えたことがわかります。

正直なところ、これまで私は歴史学の研究に携わりながらも、その成果を社会に還元しようということにはきわめて消極的でした。そういうことは政治家か行政マンにまかせ、研究者は客観的史実の追求に専念するだけで、それ以上に口を挟むのは僭越だという立場を無意識のうちにとっていたからです。

しかし、最近、徐々にこれまでの私の考えに変化が生じてきました。それは、陳の画に対する嘉義市の方々の熱気を肌で感じたことから起こった現象です。たとえ誇張表現にしても、防府市所有の画が権威ある芸術雑誌で「世界の宝」という言葉で紹介された事実を知ったものとして、このことは防府市民に伝える義務があると考えようになりました。また、嘉義市と防府市で友好関係を結ぼうと言われた言葉も重く受けとめ、心ある人々とこの問題を真剣に考える必要があるという気持ちが湧いてきました。

私どもは、山口県での地域研究にあたって、児玉先生からは、ご専門の近

世真宗の研究をはじめ、多くの教示を受けてきました。陳澄波の故郷の嘉義市の方々との交流への道を開いてくださったおかげで、山口県立大学の学生の台湾実習を豊かなものにしていただけています。そうした学生交流をへて、嘉義市の国立中正大學と山口県立大学国際文化学部の交流協定などにも結実しています。

上記の『上山満之進の思想と行動 増補改訂版』に、児玉先生からの依頼で安溪遊地が執筆した「台湾と山口県の文化交流の可能性について」という文章から抜粋し、その後の展開なども加筆してご紹介し、児玉識先生への追善としたいと思います。連載中の「台湾留用日本人」のシリーズは、1回お休みとさせていただき、次回以降に「蓬萊米と磯永吉博士」として掲載させていただく予定です。

なお、児玉先生や私どもも情報提供の形で応援している、山口出身で台湾在住の栖来（すみき）ひかりさんが2018年にまとめられた『山口と台湾をつなぐ旅』（西日本出版社）は著者のスケッチ入りで読みやすく、いろいろな教えられるところがあります。

### 山口県出身の5人の台湾総督

1895年から1945年までちょうど50年間の日本統治時代、全部で19代の台湾総督のうち、5人までが山口県出身でした。第2代・桂太郎（萩）、第3代・乃木希典（長府）、第4代・児玉源太郎（徳山）、第5代・佐久間左馬太（阿武郡川添村、現萩市）と初期には、もっぱら軍人が総督を務めました。後藤新平長官と組んだ児玉源太郎総督は、台湾のインフラ整備を進め、第8代から第16代（1919～1932）は、文人が総督を務めた時代でした。

山口県出身の最後の台湾総督が、1926年から1928年まで第11代総督を務めた上山満之進です。上山総督の退任の記念に上山が絵の制作を委嘱した陳澄波の資料に嘉義市を訪れて触れることが、山口県立大学の台湾実習の柱の一つになりました。山口県立大学の学生実習では、さらに、直接間接に上山の影響を受けて台湾で活躍した山口県にゆかりのある人々の資料に直接触れる機会もいただけてきました。それは、水産大学校で、児玉識先生と同僚であり、梅光女学院（現梅光学院）の名物教授だった先史学の國分直一先生（1908～2005）、その恩師で戦後山口県立医科大学（現在の山口大学医学部）の解剖学教授になった金関丈夫先生（1897～1983）です。この2人の大学者の蔵書や資料が、現在台湾大学図書館にあり、その整理のお手伝いをさせていただいてきたのです。

さて、2年弱の台湾総督時代、上山は当時「蕃人」と呼ばれていた原住民族の生活にも直接触れる機会をもち、その多彩な文化的遺産を研究することの必要性を感じていました。総督の退任にあたって、餞別として1万3000円という金が集まりました。当時は小学校教員の初任給が50円ぐらいでした。上山は、その大金のほとんどを投じて発足したばかりの台北帝国大学（現在の国立台湾大学）に、原住民族の文化や言語の研究を委嘱しました。國分博士は、その理由を、児玉識氏の上山についての研究を踏まえて以下のように話されました

(<https://youtu.be/cjCehhGhSRI>)。

上山さんは、被差別部落に対して強い関心をお持ちで、差別に対して強い抵抗心をお持ちでした。高砂族

は気の毒だ。いつまでもあの状態では可哀想だ。源流を明らかにすることに大学としての責任があるのではないだろうか。そうすればプライドも自覚も生まれるだろう、ということで退職金を提供されたのです。その結果、移川子之蔵・宮本延人・馬淵東一『台湾高砂族系統所属の研究』と、小川尚義・浅井恵倫『原語による高砂族伝説集』ができました（『遠い空』253頁に抄録）。

気鋭の学者たちが、あやうく後述の霧社事件に巻き込まれるところを一日違いで助かったなど、文字通り命がけでおこなった2年間のフィールドワークでした。4年の歳月をかけた執筆を経て、原住民族の民族学・言語学の大著の原稿が完成したとき、上山は、6000枚におよぶ原稿に目を通しました。上山は、東京高輪の自宅で次のように語ったといいます（朝日新聞、昭和8年10月15日、記事の全文は<http://ankei.jp/yuji/?n=2160>）。

折角贈られたので私用には使いたくないと大部分を台北帝大に寄付したのだ、蕃人の調査項目を沢山あげこの中の重なるものを研究してくれる様頼んで今度高砂族の系統、言語の二大著述となるわけだ、原稿を読んでみたが私にはわからぬ所もあったけれど幣原総長の話では調査がいゝときに徹底的になされたさうで世界で最初の研究でうれしいことだ。

この発言には、上山満之進の地域に根ざした学問への見識と愛情、そして研究の成果への謙虚さが現れていると感じられます。今となっては、いくら巨万の富を積んでも手に入れること

のできない台湾原住民の諸民族の文化的な遺産の学術的な記録がなされたことは、それまでの「統治のための学問」を越える普遍的な価値をもっています。『台湾高砂族系統所属の研究』と『原語による台湾高砂族昔話集』の合計1260頁の大作となったこの研究の成果は、日中両言語で復刻・翻訳され、今もその輝きを増しています。

さて、上山は深く愛した台湾滞在の記念にと自宅に飾る絵の制作を依頼しました。餞別として贈られた1万3000円のうち1000円を使って、嘉義市出身で帝展（帝国美術院展覧会）に入選したばかりの画家の陳澄波に油絵を描いてもらうことにしたのです。

上山が絵の製作を依頼した時、陳澄波は上海で美術の教員をしていました。実はその経歴から後に嘉義市の議員となったことが二・二八事件での公開銃殺という悲劇的な最後につながります。

上山元総督の依頼に応じて描かれた絵は、「東台湾臨海道路」と名付けられました。私どもは、この絵を見るためにいち早く防府市にこられた陳澄波のお孫さんの陳立栢氏との英語での通訳のために児玉先生に招かれた機会にこの絵の実物に初めてであったのですが、それはまた、陳澄波文化基金会の



東台湾海岸道路（複製）の説明をする  
児玉識先生（2016年12月）

みなさんとの人間的な交流の始まりでもありました。この絵に盛り込まれた、雄大な自然を背景に、新しく通じた臨海道路を歩く母子、豊かに木の繁る岸辺に点在する家々と海で漁をするらしい男達。これらは、この地点を選んで絵にすることを委嘱した上山元総督の原住民族によせる思いにそって陳澄波が描いたものでした。

陳澄波文化基金会に残されたモノクロ写真には、「東台湾臨海道路」とあり、絵の完成を告げる1930年9月13日付けの『漢文台湾日々新報』では「太櫓閣族臨海道路」となっていて、いずれも母子の姿が現在保存されているものより頭ひとつ分ほど大きくなっています。どのような経緯で絵の名前が変わり、人物像が小さくなったのか、専門を越えて広い対象に興味をお持ちだった児玉先生がご存命ならきっと目を輝かせて研究されたいだろうと思います。

### 上山満之進にゆかりの人々

上山元総督の委嘱で、台北帝大で原住民族の系統所属と言語学の研究が始まろうとする1928年、それに加わるかどうかで迷っている、学問好きの高校生が台湾にいました。それが國分直一青年です（『遠い空』2006、海鳥社、251頁）。

2歳の時に台湾に移住し、ほとんど台湾生まれ（湾生）のような意識をもって育った國分直一先生は、虚弱な体質であったため、弱い者や小さい者への共感を忘れることはありませんでした。そして台湾のもつ民族的・文化的な多様性に日常的に触れることから、異文化を生きる者どうしが尊重しあうことの大切さを身につけたのです。

國分先生は、いったん台湾を離れて、京都帝国大学文学部史学科に進学

する道を選んだのでした。しかし、文部省が法学部教授の免官を命じて、それに抗議して法学部の全教員が辞表を提出するという滝川事件（1933年）への抗議デモに参加したことをきっかけに、特高に付け狙われるようになりました。当時の京都帝大文学部の若い歴史研究者は、ほとんどがマルクシズムに染まり、危険思想の持ち主として獄中で殺されていったのです（『遠い空』234頁）。「あのままでは、國分君は獄死してしまう」と心配した台湾の恩師の配慮によって、台南女学校教師の職を得た國分先生は、満たされない学問への欲求を、台湾での地域研究に向けようとなりました。

民族学と言語学では上山の支援で台北帝大から大きな研究業績が出たのを踏まえて、彼はまだやり残されている考古学での貢献を目指しました。生前國分先生は、このような言葉をのこしています。

あの山の中に閉じ込められ、「蕃人」と呼ばれて差別されている可哀想な人々こそが、台湾の主人公であることを学問的に立証してやろう、と僕は思いましたね。

國分先生のこの思いが、上山の寄付金によるプロジェクトから大きな刺激を受けていたことは間違いないと思われます。國分先生が台南で教員になった当時、台北帝大の教授であった金関丈夫博士は、研究用の文献を送るなどして國分を支援し、やがて國分先生は金関先生を生涯の師と仰ぐようになります。解剖学を専門としながら民族学・文芸などに深い教養をもつ金関の学識と人柄は、学生時代に抑圧者への怒りからスタートした國分先生の人類・民

族・民俗・考古におよぶ膨大な研究活動にヒューマニズムの背骨を与えたと思われまます。金関先生は、台湾でやり残した仕事を終えるまでの「留用」を経て、國分先生とともに日本に帰ってから、九大などに勤め、鳥取大や宇部の山口県立医科大（現在の山大医学部）にも2年間勤務し、現在下関市立人類学ミュージアムとなっている土井ヶ浜遺跡の人骨から、渡来人との混血による日本人の成立についての先駆的な研究成果を挙げました。

國分・金関両先生への上山総督の影響は、研究プロジェクトを通して間接的なものでしたが、上山満之進に直接抜擢されて、台湾および山口で活躍した山口人がありました。萩から台湾に移った両親のもとで嘉義に育ち、1948（昭和23）年から山口県副知事・知事・衆参議員を歴任した小澤太郎（1906～1996）です。死の半月ほど前に原稿を家族に渡したという自分史『風雪』（2012、小澤克介発行）から紹介します。

小澤太郎は、東京帝国大学法学部在学中、毛利家が出資し、上山満之進が世話人をしていた「防長教育会」の奨学金を受けていました。奨学生は、毎月一度の例会に集まって奨学金を受け取りましたが、その席で自分の研究を発表することになっていました。小澤は「台湾高砂族タイヤル族の、酋長、頭目を中心に社会秩序を維持するための種々な原始的なおきてやタブー等について、それが意外にも民主的な面のあること等を述べ」ました（『風雪』34頁）。その発表を会場にいた上山が聞いていたのです。そして、就職難のなか、小澤本人の知らないうちに、台湾総督府への就職が決まっていました。小澤は、台湾で働いた後、1年半の「内地」勤務で、自分の務める興亜院が、中国

大陸でアヘンを扱う組織で、その金が関東軍にまわる仕組みであることを知って、ふたたび台湾をめざします。彼は、1941（昭和16）年2月、台湾総督府の警務局警務課長兼衛生課長に就任します。これは、全島の警察業務を統括する極めて重要なポストでした。

小澤は、課長に就任するや直ちに、第18代長谷川清総督（海軍大将）に面会して次のように意見を述べました。

自分は台湾に生まれ育った者で、台湾の友人が多く、その人々の心を自分は理解している積りである。領台以来總督府の辛苦経営により、産業は興り、経済は発展し島民の所得も増し、生活環境は著しく改善された。台湾統治の目標は島民を幸福にすることにあると思う。物質的幸福はあっても、心には多くの不満がある。それは、法制的、社会的不平等であり差別である。これを一日も早く是正することこそ府政重点でなければならない。国家非常の事態が予想される今日こそ、特にこの政策が強調されなければならない。然るに、今日この目標に逆行して、島民の宗教や信仰に干渉し、長い年月に培われた伝統の文化を無視して、性急な同化政策を押しつけることは、誇り高い漢民族の血を引く本島人にとって耐へ難い屈辱感を心底に潜在させている。島民と心から手を取り合っ、非常事態に対処することこそ、執るべき政治であると確信する。就ては文教局が指導している、偏狭且つ性急な同化政策を即時停止させて戴きたい。自分は担当の治安対策からも、全島の警察に対し、このことを指示したいのでお許しを戴きたい……。

これに対して長谷川総督と小澤の間に、次のようなやり取りがあったといひます。

**長谷川**：自分は全くお前の意見と同じである。実は近衛（文相首相）から大政翼賛会の支部を台湾に作るよう要請して来ている。自分は賛成しがたいが、お前はどうか。

**小澤**：自分は、閣下のご意見の通りで、賛成致しかねます。大政翼賛とか、八紘一宇とか、忠君愛国等、島民には理解し難く、全くなじまない思想である。本部の指示によってこのような考へを島民に押しつけることは絶対にさげなければならない……（『風雪』54～55頁）

当時公表された文献は、ことごとく検閲を受けていました。ですから、このような会話がなされたことを、同時代の史料をもって立証することは難しいことです。圧倒的な力で迫ってくる中央からの圧力の中で、実現は難しかったけれど、しかし、行政の現場にも、金関丈夫ら学者たちの中にも、台湾での皇民化運動に抵抗しようとする意志と行動があったのでした。

『高砂族系統所属の研究』のメンバーであった宮本延人（のぶと）氏は、皇民化運動の一環としての寺廟整理に対して学問の立場から猛然と反対しました。その結果、台湾の寺廟関係者からは非常に感謝され、戦後宮本が台湾を再訪問したときには、航海の女神を祀る媽祖廟で爆竹の鳴る中、生神様として神輿に載せられてパレードをさせられたそうです（『遠い空』254頁）。

このような例から、戦前から戦中にかけて、大日本帝国の官吏として台湾

で働いた人たちの中に、地域に根ざした文化や慣習を大切にしようという意識があり、その源泉のひとつが上山満之進であったことが理解できます。

台湾で活躍した山口人はこれだけではありません。インフラ整備で言えば台湾鉄道建設を進めた技師長谷川謹助（山陽小野田）がいました。昭和七年ほぼ同時に台北と台南に出現した二つの百貨店の創設者、林方一（山口市徳地柚木）と重田栄治（岩国市）は、2013年の林百貨店のリニューアルオープンによって再び注目されています。1896年、台湾での日本語教育史の原点・芝山巖で抗日テロに倒れた6人の日本人教師の中に、楫取素彦の息子の楫取道明ら二人の山口県人がいました。上山満之進の前にもそういう多くの山口県人がいたのです。山口県の歴史が好きなら、見逃せないスポットが台湾にはたくさんあるのです。

また、台湾での稲作改良と「蓬莱米」の育成に大きな成果をあげた磯永吉農学博士（元台北帝国大学教授）を、山口県の農業の発展のために小澤知事が県顧問として迎えたことも忘れてはなりません。

### いま台湾に学ぶべきこと

こうした台湾との濃厚な人的交流の歴史を、維新の歴史の顕彰にはたいへん熱心な山口県の人々は忘れたのでしょうか。山口県美祢市は、海に面していないという共通点があり、特色ある地質に共通性があるとして、観光の促進をめざす姉妹提携を台湾南投県と2011年に締結しました。しかし、南投県は、1930（昭和5）年の霧社事件のような原住民族による日本人の襲撃・

虐殺やその後の残虐きわまりない報復の歴史と記憶が刻まれた場所でもあります。また、美祢市の秋吉台は、1955年に米軍の射爆場となる計画でしたが、官民学あげての反対運動の結果、計画を撤回させることに成功したのです。その先頭に立って米軍司令部に乗りこみ「若し爆撃演習を強行するならば、知事自ら現場に座り込むとまで言った」のが、当時山口県知事であり、上山満之進に見出された「湾生」の小澤太郎氏であったこと（『風雪』109頁）などを思い起こせば、この姉妹提携もさらに意義深いものとなるではありませんか。

地域の歴史の物語の中にきちんと位置づけられた文化財は、それを愛情深くつなぎ合わせるなら、台湾をはじめとして、歴史や文化を愛する人々を強く惹きつける力となりうるのです。偏りのない歴史認識を共有し、どのようにして東アジアの友人達を招くかを、いまこそ真剣に自問すべき秋（とき）ではないでしょうか。

歴史には光も影もあります。幕末維新の長州史だって「正義派」と「俗論派」のような一方的な色分けをして済むものではありません。すぐには役にたたないように見えても、その根本資料を収集し、研究し、世界とシェアすることを可能にする熱意と文化力において、日本は台湾にはるかに遅れをとっています。例えば、山口市内にあった國分直一先生の蔵書1万7000冊をはじめとするすべての研究資料と、金関丈夫先生の文系の蔵書2万4000冊は、いまご遺族からの寄贈によって台湾大学図書館での整理が終わり、研究と公開が進められています。山口県内にはそ

れらを収蔵できる場所がなく、日本国内にもそれだけの文教予算を準備できる組織が見当たらなかったからです。日本人がまず学ぶべきは、台湾の文化遺産を大切に作る姿勢と、真剣に歴史に向き合う決意だと考えられます。

### 陳重光氏の言葉

陳澄波の長男の故陳重光氏（当時 91 歳）は、2016 年 3 月、山口県立大学からの実習生の質問に、以下のように答えられました。歴史の光と影の両方を見つめてきた方の貴重な証言です。

日本の一番悪いところは差別待遇ですね。台湾人と内地人との差別待遇。待遇はあのサハリンとか朝鮮とかその差別待遇ですね。それから宗教、強制的に拝めというんですね。天照大神とか大和民族の最高の神ですね。天皇は現人神という考えを刷り付けるんですね。そして日本語で話さないで、学校では日本語以外話してはいけないです。うちへ帰ったら台湾語ばかりですけど、うちでも日本語使いなさいと日本語常用家庭を設営したんです。これも僕としては圧力であり嫌がらせだったと思うんですね。また、戦時中は帝国主義の圧迫ですね。日本人、本州でもそういうことがあったんですが、警察局で特高という名の刑事があちこち歩き回って思想問題のある人を牢屋に放り込んだんです。戦争に反対なんて言えないです。これらが嫌な所ですね。

ところがとてもいいこともしていたんです。建設とかあるいは交通建設、工業建設、それに農業に

対しても、みなさんが今日行かれる嘉南大圳（かなんだいしゅう、八田与一が建設を指揮した烏山頭ダムと 1 万 6000 キロに及ぶその灌漑水路）もとてもいいことでした。「法に従え」というのもいい政治だったんですね。法を守れと。だから台湾の人で歌をうたった人があるんです。「法の祖国は日本、血の祖国は中国。そして心の祖国は台湾」という歌で



左から上山忠男・陳重光・陳立栢の各氏。  
2016 年 9 月 嘉義市

なぜ日本に好感を持つかということとその戦後ですね、台湾は中華民国政府にひどい目にあっただけです。独裁主義とか、白色恐怖の政治。それが悪いところは、日本時代の悪いところは全部残してそれを倍増したんです。だからもう台湾としてはひどい目にあっただけです。日本時代より何倍かひどい目にあっただけです。それで日本時代のいいところを思い出して好感を持てたわけなんです。これが李登輝総統から徐々にそうなったんですね。

新しく選ばれた蔡英文総統がもっと台湾の民主政治、自由経済に貢献することを望んでいます。まあいまのところ一番開明の総統として羨まれるということになるでしょうね。それを期待しています。

## 蔡英文総統

中華民国第14代総統に選出された蔡英文氏は、2016年5月20日に行われた就任演説で、台湾の政策を、多元性、平等、開放、透明性、人権などの価値に合致したものとしていく決意を語り、歴史に向き合う態度について次のように述べました。

（歴史の）真相を明らかにし、傷跡を癒し、責任を明確にします。そしてそれからは、過去の歴史が台湾における分裂の原因ではなくなり、共に前進するためのエネルギーへと転じるのです。

同じく公平性と正義の問題に関して、私は同じ原則で原住民族の問題に向き合います。今日の就任祝賀大会で、原住民族の子供たちは国歌を歌う前、まず彼らの集落の伝統的な調べを歌ってくれました。このことは我々が、この島の人たちがやってきた順番を忘れてはならないことを象徴しています。

新政権は謝罪の態度で原住民族に関する問題に向き合い、原住民族の歴史観の再構築、自治の段階的な推進、言語と文化の再生、生活支援の強化に取り組めます。これは私が新政権をリードして進める変化だといえます。

蔡英文総統は、2017年2月23日から総統府において陳澄波の絵画展を開催しました。陳重光氏を招き、銃殺された陳澄波の名誉を70年ぶりに回復し、公式に遺族に謝罪するとともに危険を顧みず絵を保存してきた張捷夫人の勇気ある行動を称えました。

また、再選後の現在は、新型コロナウイルスの蔓延というグローバルな危機にあって、いち早く専門家を配置し

て、感染を押さえ込んでいる卓越した手腕が世界的に注目されています。

## 陳澄波筆「東台湾臨海道路」の里帰り

児玉先生や上山満之進の縁者の上山忠男先生が牽引してきた、防府市の「上山満之進に学ぶ会」の粘り強い取り組み

元台湾総督  
上山満之進

画家  
陳澄波

山口県  
防府市

台湾  
嘉義市

地域公開フォーラム

防府の先人 上山満之進の精神を  
いかに現代に活かすか  
～台湾との友好を目指して～

日時：2016年12月11日(日) 14:00～16:45  
場所：防府グランドホテル 2F フリージア  
防府市駅南町15-20 (tel 0835-25-1133)

主催：上山満之進に学ぶ会 共催：防府・山口市民嘉義市友好訪問団/山口県立大学国際文化学部  
協力：陳澄波文化基金会(嘉義市) / 防府市観光協会 / 防府職工会議所 後援：周南市児玉進太郎顕彰会

入場  
無料

予約  
不要

## 上山満之進に学ぶ会と山口県立大学の 共催フォーラムのチラシ

みが実って、防府市の議員や新しい池田豊市長の働きで、台湾と防府市との交流も徐々に進められる準備ができてきたところに、今回の新型コロナ肺炎で足踏みが続いているという状況です。

上山満之進の顕彰のフォーラムは、上山満之進に学ぶ会の主催と防府市主催で複数回もよおされました。2019年9月27日に上山満之進翁生誕150周年を記念して、上山が寄贈した三哲文庫の跡地が、児玉先生の発案から「三哲文庫記念公園」と命名されました。また当日は、児玉先生の記念講演「上山満之進翁と防

府図書館前身『三哲文庫』が行われる予定でしたが、急なご入院のために、児玉先生から安溪遊地が代打の指名をいただきました。私どもは台湾での沖縄県の文献調査に加わるために出発する直前でしたが、児玉先生が事前に準備された配付資料に沿ってなんとか無事に終えることができました。上山満之進が三哲と呼んだ、吉田松陰・品川弥二郎・乃木希典にゆかりのお話と、会場のみなさんとともに唱歌を歌うというパフォーマンスを加えた発表のようすを、ビデオでごらんになった児玉先生が、手をたたいて喜ばれたということを知り、ひと安堵したのでした。台湾からもどって、もう退院されているだろうと思っているとところへ、訃報が届いて驚いたことでした。

陳澄波の作品「東台湾臨海道路」は、2019年に福岡市からゆかりの防府市に戻りました。この油絵は、2020年10月17日から2021年1月17日まで台北市内の台北教育大學北師美術館で開催された「不朽的青春—台湾美術再発見」の展覧会の目玉として、90年ぶりの里帰りをはたし、台湾でも大きな注目を集めています。

以下は、私どもが学生たちに語りかけている言葉です。

児玉先生も防府市を例として野球での交流など具体的に提案しておられますが、高い意識をもち、教養の程度も高い台湾の人たちを山口県にお迎えするプログラムを考えてみませんか。台湾の人たちの大好きな温泉や、上山の薫陶を受けた「湾生」の知事が先頭に立って守った秋吉台などの豊かな自然、このほど名前が復活した三哲文庫記念公園、上山満之進の資料を集めた上山文庫、上山が生涯親密な関係を保った毛利家ゆかりの毛利邸や英雲荘

(いずれも防府市)などに残されている古きよき日本の姿を残す文化財をともに見てまわるといような、ていねいな交流プログラムを企画・提案して、台湾の人たちとの間に、心の架け橋をかけていきましょう。

## 付記

前号に登場されたアメリカ東海岸在住の李高坂玲子・李遠川両先生から年頭にZoomでお話を伺いました。玲子さんが戦後「日僑学習所」で学んだおりのボランティア教員は、歴史が國分直一先生、絵は立石鉄臣画伯、そして音楽は宮本延人先生の奥様だったということです。また李遠川先生(およびノーベル化学賞を受賞した、弟李遠哲先生ら)の父君李澤藩(Lee Tze-Fan 1907 - 1989)は、新竹市に李澤藩美術館があり、台北の師範学校で陳澄波と同じく石川欽一郎から絵を習って画家になりました。長男として石川先生から川の1字をもらって遠川と名付けられたのに、親の期待に反して化学の道へ進んだのだとのことでした。

## 再度の訂正とお詫び

本誌第67・68号の29頁、松本巍先生が北海道帝国大学で学んだというのは記憶の誤りで、1907年～1919年は東北帝国大学農科大学という名称でした。お詫びして訂正します。

(あんけいゆうじ・あんけいたかこ)

[http://ankei.jp\\_y@ankei.jp](http://ankei.jp_y@ankei.jp)